

〔講演要旨〕 古都鎌倉の関東大震災を歩く

— 世代を越えた社寺復興 —

名古屋大学減災連携研究センター* 武村雅之

関東大震災から 90 周年を迎えた。震災の記憶が風化する中で今でも多くの慰霊碑や記念碑や遺構などが巷に存在する。今回は古都鎌倉を対象に 57 地点 95 件の調査を行った。そのうち特に神社・仏閣の復興に焦点を当てて調査結果を報告する。

鎌倉では強い揺れの他に、延焼火災や津波の襲来があったが、『鎌倉震災誌』(1930)や『震災予防調査会報告 100 号』(1925)を見ると、それらの影響は極めて限定的であったことが分る。延焼地域や津波の浸水地域には幸いほとんど神社、仏閣が無かったからである。昔から津波や高潮の被害を受けていた材木座海岸では、すでに寺院の移転が行われていた。例えば、円応寺は 1703(元禄 16)年の元禄地震の津波で流され、その直後に山ノ内の現在位置に移転している。また豆腐川の河口近くにあったと推定される妙長寺は 1681(天和元)年の海嘯で流された後に、より内陸の現在地に移転したと言われている。

このように、火災や津波の影響が少なかったことは、神社・仏閣の震災復興にとって極めて大きな意味を持っていたように思われる。震災で倒壊した神社・仏閣の建物の再建に際しては、当時、ほぼ例外なく、潰れた建物から使える材料(古材)を選び分けて再利用がなされていたからである。

『鎌倉震災誌』の中から、社殿や本堂(仏殿、観音堂)が全潰または単に全潰と記録されているものならば、それ相当の被害と判断されるものを抜き出し、それらが復興再建された年代を調査しまとめた。上記の条件に合致するのは 30 寺院、8 神社であった。

全潰した寺院のうち再建できずに鎌倉を離れたのは、西御門の高松寺ただ一つである。神社では極楽寺の熊野新宮が 1927(昭和 2)年に社殿と鳥居を再建し、翌年同じく全潰した八雲神社と諏訪神社の両者を合祀しているので神社の数は 2 つ減少したことになる。

震災から比較的早い大正年間に復興したのは、建長寺、寿福寺、海蔵寺、巽神社(以上北部)、来迎寺、妙隆寺(以上東部)、別願寺、妙長寺、実相寺、九品寺、補陀洛寺、千手院(以上南部)の 12 社寺で全体の 1/3 以下に留まり、残り 26 社寺は昭和に入ってから復興されたものである。多くは 1933(昭和 8)年までに一応復興しているが、その陰には政府の出し

た通達がある。政府は震災後の世情安定対策として、社寺復興を促進することを決め、当初 1928(昭和 3)年 8 月末までに復興しないものは社寺明細帳から除去するとしたが、被災社寺にとってさすがにそのハードルは高く、期限を 5 年間延長し、1933(昭和 8)年までとしたのである[『横須賀市史』資料編近現代 II (2009)]。それでも 5 寺院は、復興がそれ以降にずれ込んでいるようである。

大正期に早々復興した 12 寺院を見ると、そのうち建長寺の仏殿・唐門は重要文化財であり、国庫の補助に依って修復されたもので、他の寺院とは多少事情が異なっている。他の寺院の中には仮復旧故に早かった寺院もある。少なくとも現在の住職から仮復旧であったことが確認できたものだけでも、来迎寺、妙隆寺、妙長寺、千手院の 4 寺院にのぼる。そのうち初めの 3 寺院は平成 10 年以降、約 80 年余りの歳月をかけて本格的な復興が成し遂げられ、本堂が新築再建された。一方、千手院は未だに仮復旧のままのことである。

このように復旧に時間を要したのは、中小規模の寺院だけではない。鎌倉五山第二位の円覚寺でも、仏殿が鉄筋コンクリートで復興されたのは震災から実に 41 年も経った 1964(昭和 39)年のことであった。また、長谷寺の中心にある観音堂は 1943(昭和 18)年にようやく復旧するが、罹災が激しく 1986(昭和 61)年になって本格的に鉄筋コンクリートで新築された。

また、30 寺院には含まれないが、現在の鎌倉で唯一尼寺として残る扇ガ谷の英勝寺では、倒壊した山門が震災後ある資産家買い取られていたのを 2001(平成 13)年になってやっと買い戻し、復興工事が行われて 2011(平成 23)年に落慶法要が行われたという。

以上のように、関東大震災の被害は、鎌倉の神社仏閣にとって決して過去の話ではなく、復興が世代を越えて持続的に続けられてきたことがよく分かる。古都鎌倉が幾多の天変地異にもかかわらず今も存在し続けているのは、被害に遭った人々の地道な復興への努力の賜物である。最後に、震災で多くの国宝や文化財が損傷したのを受けて、1928(昭和 3)年に有力寺院と鎌倉同人会の発案で鶴岡八幡宮境内に国宝館が竣工したことも忘れてはならない。

* 〒464-8601 名古屋市千種区不老町